



2001年7月3日 公開シンポジウム報告：「くろすと ーくMEIGAKU『教科書』問題を考える」

著者	大西 晴樹
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュー ースレター
号	26
ページ	1
発行年	2001-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/312

2001年7月3日 公開シンポジウム報告
「くろすとーく MEIGAKU『教科書』
問題を考える」

大西 晴樹

キリスト教研究所・国際平和研究所共催のシンポジウム「くろすとーく MEIGAKU『教科書』問題を考える」が7月3日(火)白金校舎1101番教室において開催された。

開催の引き金は、「新しい歴史教科書をつくる会」による『新しい歴史教科書』が文部科学省の検定を合格したことにある。この教科書には、戦後の日本がそれまで進めてきた戦争・侵略の歴史を過ちと反省し、そこから歴史認識・国際協調の再構築をはかるという基本路線を覆し、むしろそのような態度を「自虐的」と捉え、戦争を国家発展にとって当然の成果、民族の誇りとして解釈する好戦的な歴史認識が脈打っているのである。当然、中国・韓国など侵略された近隣諸国との軋轢は高まり、しかも採用方式が今年度から新たになったことからこの検定合格教科書が実際にどれくらい採用されるか分からないという状況の中での開催であった。

この種の集會に学生が足を運ばなくなつてから久しい。なんとかこのシンポジウムを文字どおり教員と学生の「くろすとーく」の場にしようとの狙いから、講師の依頼には人一倍気を遣った結果、ベストの陣容で臨むことができた。講演順に説明すると、歴史教育者協議会の石山久男氏は、絶えず歴史教育の問題を現場教師の視点から問い直している団体の事務局長で「新しい歴史教科書」の問題点を詳細に説明できる方である。東京大学教授の姜尚中氏は「戦後民主主義のゆらぎ」を主張するすぐれた政治

社会学者であるが、学生がよく観ている討論番組「朝まで生テレビ」の論客でもあり、この問題において学生を魅了することのできる数少ない方である。国際学部教授の加藤典洋氏は、その著『敗戦後論』において、戦争に対する反省の弁と賛美の弁が同時並存する「戦後日本のねじれ」を指摘した思想家であり、明治学院大学のスタッフの中では格好のパネリストといえよう。

さて「くろすとーく」当日、主催者の心配をよそに学生を中心に350名近くの聴衆がところ狭しと集まり、1101番教室は久々の熱気に包まれた。まず石山氏がアジアの人々や女性の人権に対する認識を欠いた「新しい歴史教科書」の問題点を指摘し、姜氏はバブル崩壊後に台頭した「新しい歴史教科書をつくる会」が政治運動体であり、現代日本における国体明徴運動の性格を担っていると解説した。加藤氏は歴史認識の主体を問題にする立場から、外在的・内在的認識のバランスの重要性を強調した。その後の討論においても明学生を中心に興味深いやり取りがあり、用意された3時間10分は瞬く間に過ぎ去ってしまった。

主催者として、もちろん現行の教科書の叙述がよくて、「新しい歴史教科書」がア・プリオリに悪いなどというつもりはサラサラない。今回の「くろすとーく」が明らかにした地平は、わたしたちが生活するこの「戦後」と言う「時間」と「空間」をしっかりと踏まえ、そこでわたしたちが長年育んできた価値観にしたがって自ら胸を張って誇ることできる「歴史教科書」を志向することであり、10数年前の第1回「くろすとーく MEIGAKU」が昭和天皇危篤の際の自粛ムードを晴らすかのように開催されたごとく、キリスト教大学としてこのような機会を通じて絶対化しつつある国家を相対化することではないだろうか。

(おおにし はるき 主任・経済学部教授)